

日本語における動詞連鎖構造と時間のヴィジョン

中川正弘

0. はじめに

先に日本語における「ねじれ」の感覚について論じた際¹⁾、そのような感覚が生じる条件となっている日本人の「長文志向」に言及した。西洋言語の作文教育では、「文(単文)」が作れるようになれば、それを論理によって組み立て、だんだん長くしていく。ところが、日本人向けの作文教育では、「ねじれの撲滅、短文化」が重要な項目としてあがるという事実が示すように、日本人はほうっておけば文をいつまでも長くだらだらと繋いでいこうとする。そうする中で、言い出しで使った論理や文法を忘れてしまい、帰結部に至って言い出し部分と論理のかみ合う言葉が使われないことがよくあり、これではいけないと考える。そこで、日本人に文章作法を指導する教師はほぼ例外なく、このような「ねじれ文」をなくすために、「文を短くまとめる」よう指導する。つまり、西洋言語が「短い文→長い文」と導くのにに対して、日本語では「長い文→短い文」と導くのである。

これについて考察した際、「てててててててててて。」といくつもの動詞句を「て」で繋ぐ文は一つの文と考えるべきなのか、それとも「て」の数だけ「文」が繋がれていると考えるべきなのか、要するに「文」という単位はどのように成立するのかと考えた。

本論では、「文法」において、前提以前のこととして疑問視されることのない「文」の概念についてまず考え、日本語の「話し方、綴り方」の根幹にある時間のヴィジョンを論じたい。

1. 「文」「単語」という言語単位

日本語教育で「文」という言語単位を説明することはまずない。教科書で用いられる日本語の例文は、解説として付けられる英語翻訳によって裏打ちされている。と言うより、英語の「文」と「文法」を暗黙の基準と扱っているため、習わしとして比較しうる英語(翻訳)が単文であれば単文、複文であれば複文と考えられる。従って、英語に置き換えられない文の要素は解説において無視される。

A-0 I went to the station by bus.

B-0 I studied at the classroom.

A-1 わたしはバスで駅へ行きました。

B-1 わたしは教室で勉強しました。

A-2 わたしはバスに乗って駅へ行きました。

B-2 わたしは教室に行って勉強しました。

A-1 と **B-1** は英語文と同様、動詞がひとつしかないので、単文としか言えない。しかし、**A-2** と **B-2** はどうだろうか。「バスで」と「バスに乗って」の形式上の違いにとらわれず、これらを「同義」と考えれば「単文」だが、形式上の違いを区別すれば、動詞が二つあり、**A-2** と **B-2** は「複合文」と見える。

日本語で「何で行きましたか。」と聞かれた場合、「バスに乗って」と答えても、形式的に対応しない「文法違反」、あるいは「ずれている」と見なされるわけではないのだから、まったく同義と考えても差し支えない。「何で」と事実上同義と見なされる疑問表現は「何に乗って」だけでなく、「どうやって」「何を使って」などもあるのだが、これらを区別して紹介する日本語教科書などない。英語が一つの単語で済ませているものに対応する日本語はできるかぎり一語に代表させるのが日本語教育の基本姿勢だ。

しかし、中には扱いにくいものも出てくる。理由を問う英語 **Why** に対応する日本語は日常普通に使うものだけで「なぜ／なんで／どうして」と三つはある。この中で表現に動詞を含む「どうして (**how + do**)」などは、英語準拠型の「初級日本語文法」では扱いたくないところだろうが、日本語の会話で三つの中で真っ先に使われるものがこれということで、出さないわけにはいかない。こういう場合に日本語教育で普通に使うのが「単語扱い」という方法だ。分析的な解説などせず、対応する英語が「単語」であれば、日本語で複数の語からなるものでも「単語」と扱う。

定型化して複合助詞 (**compound particle**) と扱われる「について」「にとって」「に対して」「において」などになると、動詞起源でありながら、その動詞性はまったく顧みられない。

2. 日本語と「時制」

日本人が「時制」という概念に出会うのは英語など西洋言語を学び始めた時だ。日本語を母語とする日本人が国語文法において教えられる動詞の文法は「活用」という主に文中の接続における音の変化が中心にあり、「時間」に関わる概念としては「完了」しか出てこない。

ところが、日本語文法を英語文法に準拠させると、日本語にもちゃんと「時制」があるように見えてくる。

現在	あそこにイスがある。	わたしはその映画を見る。
過去	あそこにイスがあった。	わたしはその映画を見た。
未来	*	わたしはその映画を（明日）見る。
現在進行形	*	わたしはその映画を（今）見ている。
現在完了	*	わたしはその映画を（もう）見ている。

過去完了	*	わたしはその映画を見ていた。
過去進行形	*	わたしはその映画を見ていた。

西洋言語において、「時制」は「文」というものが正しく存在するための条件と言ってもいい。過去、未来という、「発話の現在」からの位置づけだけでなく、一つの文に複数の動詞が含まれる場合には、それらの動詞の表す時間の前後性、同時性を定位するためのまさしく「時の制度」であり、これに則って作られた「文」は「遠近法（透視図法）」によって描かれた西洋絵画のように「秩序」を表現する。

英語では、時制を表す動詞部は一つのユニットになり、上の日本語の例文に対応させれば以下のようなになる。

現在	is	see
過去	was	saw
未来	will be	will see
現在進行形	*	am seeing
現在完了	has been	have seen
過去完了	had been	had seen
過去進行形	*	had been seeing

英語の時制ユニットを形成するのは動詞、助動詞、不定詞、現在分詞、過去分詞である。一方、日本語で用いられるのは、「完了」を表す形態素「た」と、この「た」を継続型に活用させた程度の違いしかなく、やはり「完了」を表す形態素「て」の二つであり、英語の時制と対応させないで見れば、極めて単純な複数動詞「動詞①＋動詞②」による構成だ。

「～ている」「～ていた」、またこれに「～てある」「～てあった」くらいを加えただけで考えれば、「いる≒be」「ある≒have」と見えるため、「助動詞」を使った「時制」と見なしやすくなる。しかし、これらを「～てくる」「～ていく」「～ておく」「～てしまう」など、同じ作り方をするさまざまな複合形と並べると、時制のバリエーションとは見えにくくなり、「補助動詞」「複合動詞」という範疇が立てられる。とはいえ、これらには英語の時制に対応していると見えるものと、翻訳もされず黙殺されるものが混在するため、外国人学習者にとって理解しがたく、習得の困難な語法となっている。また、日本語作文の添削でも、「間違い／正しい」だけでなく、「使う／使わない」の判定にゆれが生じるため、扱いが定まりにくい。

このような場合、英語と同様に「単一の動詞部」と扱うのがつねだが、どうしてもそうせねばならないのだろうか。西洋言語の文法の柱である「時制」を基準として並べるとそ

うしか見えないのだが、ここで一步後退し、「複数の動詞が繋がれている」という単純な形式のあり方に立ち戻るとどう見えるだろうか。

3. 日本語における動詞の多用と連鎖接続

英語翻訳で時制に翻訳されることが多い「補助動詞」にしろ、時の表現からかなりはみ出すさまざまな表現を合わせた「複合動詞」にしろ、「複数の動詞」からできたものを「単一のユニット」と見ようとする点では同じだ。

ここで日本語において、複数の動詞（あるいは形容詞）が「繋がれる」こと一般について考えてみよう。

日本語で繋がれるのは補助動詞、複合動詞に限らない。複数の動詞要素が繋いで作られていながら動詞であることを忘れてしまうような言葉、表現がかなりある。

反意語の組み合わせは英語にもあるが、動詞のものはどれほどあるだろうか。日本語は動詞の使用が極めて多い。

出入り	上げ下げ	乗り降り	賛成反対
in/out	up/down	on/off	for/against

また、多くの言語では名詞化された動詞は形容詞、副詞で修飾するのが普通で、そのようなものは日本語でも作れなくないのだが、日本語では動詞を重ねるものがひじょうに好まれるようだ。

走り書き	殴り書き	行き違い	話し合い	見回り	飲み過ぎ・・・
quick	rough	wrong	each other	around	too much

動詞が使われていることをほとんど意識しなくなった基本表現も少なくない。

どうして、生まれて初めて、行ってきます、～してください
～してもいい、～してはいけない、～しなければならない、

そして、もっとも多いのが時間的に前後する行為の連鎖だ。一つの動詞に代表させないことで、状況が時間の経過を含み、いくらかリアルな印象を与える。

食べ歩く、し損なう、し間違える、し終える、たどり着く、聞き取る、走り去る、流し込む、たたき壊す、垂れ下がる、引き出す、洗い流す、駆け上がる、走り下りる、開け放つ、食べ尽くす、立ち寄る、

閉じ籠もる、引き抜く、・・・

このように動詞の使われていることを忘れてしまうほどなじんだ表現と違い、文末など、文の主動詞が含まれる動詞ブロック内のは文法項目と見なす傾向が強い。しかし、その扱いは「動詞そのまま」とは言い難い。

補助動詞（～してみる、～しておく）

私は日本の小説を読んでみる／みます。

① I will **try to** read Japanese novels.

② I will read Japanese novels (**to see what they are like**).

③ I will read Japanese novels (**and see what they are like**). 【③は筆者が追加】

あしたパーティーをするのでビールを買っておいた／おきました。

① Since we are having a party tomorrow, I bought some beer **in advance for it**.

② Since we are having a party tomorrow, I bought some beer **and waited**. 【②は筆者が追加】

「～してみる」は①のように「try to do ～」が標準的な翻訳だが、文法辞典（A Dictionary of Basic Japanese Grammar）では②のように動詞「見る」の語義を残すような翻訳もされる。しかし、きれいな短文にまとめるため単純連鎖型の③のような連続文は避け、to-不定詞を使っている。

「～しておく」については説明文で「置く： put / place」と文字通りの意味を示しはするが、これを使った英語翻訳が使われることはない。ほぼ例外なく非動詞化して副詞句「in advance」と置き換えられる。しかし、「みる」の場合と同様、「おく」は動詞としてそのまま扱えなくない。

日常よく使われる「時間を置く（3分／一日／一晚／・・・）」という表現は「待つ」を表す簡単な比喩だ。「前もって」という表現が使えるのは「時間を置く → 待つ → この後に来る出来事 → 前もって」の連想による。従って、②のような英語のほうが日本語の構造を示しやすいはずだが使われていない。

「～してみる」も「～しておく」もきわめて単純に二つの前後する行為、時間を並べる語法だ。文法らしくということで、「文脈・状況に応じて選ぶ」ものであるかのように普通説明される。だが、このような補助動詞は使わず、「小説を読む／読みます」「ビールを買った／買いました」としても状況に適った正しい日本語となる。つまりこれらは表現の装飾

的オプションにすぎないと言えなくない。このような「配慮」は文法というより日本人の好むコミュニケーションのエチケットと考えてはどうだろうか。

4. 英語の「現在進行形」と「～ている」の時間論理

次に、論理と文法に大きく関わり、見過ごせない問題となっている語法を見てみよう。「～ている」はもっとも基本的と考えられる補助動詞だが、これを日本語教育ではどのように扱っているか、その典型となる例を見ておこう。取り上げるのは文法に関して多くの日本語教師が参照していると思える英語版の日本語文法辞典、『A Dictionary of Basic Japanese Grammar(日本語基本文法辞典)』²⁾、『日本語教育辞典』³⁾、そして近年の文法研究の成果を多く汲んでいる『日本語文法ハンドブック』⁴⁾である。

【A Dictionary of Basic Japanese Grammar (以下 D.B.J.G.)】 (英語訳は該当箇所のみ引用)

ている

[Someone or something is doing something he or it started some time ago, or is in a state created by an action he or it took some time ago.]

-- be ~ing ; have done (something)

Key Sentence : 佐々木さんは酒を飲んでいる／います。(Mr.Sasaki **is drinking** sake)

(a) 和江は新聞を読んでいる。(continuation of an action or state : **is reading**)

(b) このりんごはくさっている。(momentary action・・・something happened to X and X maintains the state which was created by that event : **is rotten**)

(c) 木が倒れている。(A tree **has fallen** down and **is lying** there)

(d) 私は鈴木さんを知っています。(I **know** Miss Suzuki: *shiru* means 'to get to know',・・・continuation of the state after・・・)

(1) 私は毎日四マイル走っている。(habitual action : **run** every day)

(2) 次郎はアメリカに行っている。(**has gone** and **is** there)

ベックさんはもう家に帰っています。(**has already returned** home and **is** there)

(3) 私は東京に住んでいる。(I **live** in Tokyo : present state)

ウェストさんは日本語はやさしいと思っている。(・・・**thinks that**・・・: present state)

てある

[Something has been done to something and the resultant state of that action remains.]

--have been done ; be done

Key Sentence : それはもうジョンに話してある／あります。(It's **been told** to John already.)

(a) 飲み物はもう買ってあります。(Drinks **have already been bought**.)

(b) 窓が開けてある。(The window **has been open/is open**.)

(1) 窓が開いている。(The window is open : It doesn't imply that someone opened it. *aku* 'open' is an intransitive verb.)

(2) 私は窓を開けておく。(I open/will open the window (in advance): do something in advance for future convenience. . . expresses an action.)

「〜ている」について用いられている例文の英語翻訳 10 のうち、現在進行形は 2 例、現在完了は 4 例、現在時制は 4 例である。

【日本語教育辞典:1987】

- ① 本を読んでいる。(動作・作用の進行の状態)
- ② 戸が開いている。(動作・作用の結果の状態)
- ③ この道は曲がっている。(単なる状態)
- ④ 彼は去年富士山に登っている。(経験・記録)
- ⑤ 毎日大工さんが来ています。(繰り返しの動作)

D.B.J.G.は英語使用者向けであるため、当然すべての例文が英語に翻訳されているが、こちらは主に日本語教師向けであるため、例文に英語翻訳は付けられていない。しかし、この配列で上位三つ①②③が「be + ~ing」「be + p.p.」「be + 形容詞化した過去分詞」のように翻訳すれば be 動詞を使うものと考えられる。そして、④が「have + p.p.」に相当する例、⑤が「来る」と「来ている」の違いを示せず、ただ「現在」しか出てこない例であるため、やはり英語の「現在進行形」を中心とする配列であることは明白である。

「動作・作用」という言葉を使うのなら、「開く」も「曲がる」も変わらないはずだが、「曲がる」という動詞を使っても、「比喩」に過ぎず、「曲がる前」などないし、「曲がる」ところを見たわけでもないということで「状態」と扱おうとしているようだ。大地震で道の形状が変わったりした場合には「動作・作用の結果の状態」に加えてもらえるのだろう。

日本語研究者が語法を定義するとき、動詞の語義自体と、状況・文脈の中で理解する内容との間に起こるこのようなずれが当たり前のように表れることはもっと注目されているように思う。動詞がその語義として表すプロセスと、その動詞が使われた場合に表しえるその前後のプロセスには、個人の主観的な差もあるだろうが、言語文化の特徴となるものもあるのではないだろうか。

【日本語文法ハンドブック：スリーエーネットワーク、2000】

- (1) 田中さんはレストランで夕食を食べています。(動作・出来事の継続)
- (2) 教室の窓ガラスが割れています。(状態の継続)
- ...
- (7) 山田さんは中国に行っています。(変化の結果の状態の継続：山田さんは中国に行きました。+山田さんは今、中国にいます。)
- (8) 弟は私の家に来ています。(変化の結果の状態の継続：弟は私の家に来ました。+弟は今、私の家にいます。)
- (9) 私は毎日公園を散歩している。(習慣)
- (10) 彼女は週末ごとに大阪へ行っている。(習慣)
- (11) 私は若いころ、よくあの喫茶店で友だちと話していた。(過去の習慣)
- (12) 犯人は3日前にここで食事をしている。(経験・経歴)
- (13) この本は10年前に絶版になっています。(経験・経歴)

(1)で「継続」と言うのは、D.B.J.G.なら「continuation」、『日本語教育辞典』なら「進行」とされるのと同様「現在進行形」を想定しているからだ。だが、ここではさらに(8)までの3例にもかなり強引に「継続」と書き込んでいる。また、「割れる」と「行く／来る」は「状態」と「場所」の違いがあるだけでどちらも同じように語義としては「変化」と見なせるはずなのだが、ただの「状態」と「変化の結果の状態」とに区別している。

「割れています」が「変化の結果」と見なされないのは、「割れる前」を考えていない、あるいは、「割れる」ところを見ていないと考えてなのだろうが、それでは「割れる」を動詞と見なさないと言うに等しい。このようなプロセスイメージの編集はかなり恣意的だ。ここには定義をする日本人の意図、あるいは潜在意識が見えてくる。

以上「～ている」の三つの定義は、「continuation／進行の状態／継続」と、同義的な言葉を用いており、「現在進行形」を基準としていることが分かる。しかし、D.B.J.G.の英語翻訳では使わないわけにはいかない「現在完了(present perfect)」に含まれ、日本語の文法にも存在する「完了」という基本的な概念をあとの二つの定義では避けようとしているように感じられる。どうして「完了」という言葉を使おうとしないのか。おそらく「継続」とは「終わらない」ことであるため、「継続」と「完了」を並べれば「矛盾」と見えてしまうことを恐れてだろう。

英語の「現在進行形 (be + ~ing)」を日本語に翻訳するとき、標準的に使えるという事実が根拠となり、日本語教育では、『～ている』＝継続＝現在進行形」と言えるほどの

扱いをするため、この等式が成り立たない場合は動詞の語義が原因と見なそうとする。

しかし、「翻訳に使える」という事実はそれ以上何も説明しない。言語教育において説明として「翻訳」以上の分析が求められることはあまりないのだが、英語の時制体系のミクロ部分についてこのように個別に日本語を対応させているだけでは日本語のマクロの体系性がやはり見えてこない。「～ing(現在分詞)」のない日本語で、「～ている」がどのような論理によって「継続」を表しているか、これを明示するほうがいい。

三つの文法定義はどれも、「～ている」は英語の「現在進行形」だけでなく、「結果・経験」、つまり「現在完了」の翻訳にも使えるように読める。しかし、それをはっきり「have + p.p.」を使った英語翻訳で示しているのは D.B.J.G. だけだ。『日本語教育辞典』はここで「have」をできるだけ見せたくないようだ。また『日本語文法ハンドブック』は、基本方針として英語翻訳をまったく付けていないのだが、「継続」を標準と扱っているということで他と同様、英語の「現在進行形」を強く志向しているのは明らかだ。

結局、どの場合も、「進行・継続」が標準となる第一用法であり、「結果・経験・習慣」は第二、第三の非標準用法という見方をしている。

「文法積み上げ式」の旧式の教科書が嫌われる現在、これを文法項目として明確に扱っている日本語教科書はないようだが（日本語初歩、みんなの日本語、SFJ・・・）、実際どう扱っているか、一例として多くの日本語教育機関で使われている『みんなの日本語 I、II（全 48 課）』を見てみよう。【現在進行形、現在、現在完了、・・・の書き込みは筆者】

第 14 課 電話をかけています。(is making : 現在進行形)

【certain action or motion in progress : 現在進行形】

第 15 課 パソコンを持っています。(has : 現在)

電話番号を知っていますか。(know : 現在)

大阪に住んでいます。(live : 現在)

結婚しています。(am married : 現在)

富士大学で教えています。(teach : 現在)

【a certain continuing state which resulted from a certain action in the past : 現在完了?】

第 28 課 毎朝ジョギングをしています。(jog : 現在)

休みの日はいつも何をしていますか。(do : 現在)

【customary action : 習慣】

第 29 課 窓が閉まっています。(is closed : 現在)

この自動販売機は壊れています。(is broken : 現在)

外側に大きいポケットが付いています。(has : 現在)

よく覚えていません。(don't remember : 現在)

中に何が入っていますか。(is : 現在)

ちょっと待っていてください。(wait : 現在)

【state which results as a consequence of the action expressed by the verb : 現在完了?】

第 30 課 交番に町の地図がはってあります。(there is ・ ・ affixed : 現在 / 受動)

【「はられています」との比較はない。】

第 37 課 ドミニカでは何語が使われていますか。(is used : 現在 / 受動)

【「使われます」との比較はない。】

第 38 課 日記を続けていますか。(are keeping : 現在進行形)

第 39 課 最近布団で寝ているんですが、・・・(sleep : 現在)

みんな心配していたんですよ。(was worried : 過去)

人がたくさん並んでいて、・・・(were queuing : 過去進行形)

第 40 課 酔っていた。(was drunk : 過去)

第 42 課 貯金しています。(am saving : 現在進行形)

毎日練習しています。(am practicing : 現在進行形)

第 47 課 フランスに住んでいたそうです。(lived : 過去)

パーティーでもしているようですね。(are having : 現在進行形)

人が大勢集まっていますね。(there are ・ ・ gathered : 現在 / 受動)

パトカーと救急車が来ていますよ。(there are : 現在)

第 48 課 お風呂に入っています。(is in : 現在)

この教科書の英語版解説書では、「過去の行為の結果として生じた状態、またはその状態の継続」という長々とした説明があるのだから、D.B.J.G.のように「現在完了 (have + p.p.)」を使った英語が少しは出てきてもよさそうだ。しかし、一切採用されていない。日本語では「～ている」だが、英語では「現在」など単純形になる、つまり単純に文法形式を翻訳できないものを優先する。文法形式の対応を優先させると、機械的に形式操作をすることで間違いが生じると考えてなのだろう。しかし、その結果、「～ている」の間違いが生じにくくなっているかと言えば、とてもそうは思えない。

英語助動詞の「have」を「～である (have + p.p.)」にかなり強引に割り当てることもあり、例外が多いながら、「～ている = be + ~ing」という等式が学習者に強くすり込まれる。その結果、英語動詞で単純形を使うような場合に日本語で「～ている」が使えず、「する」になる誤用がきわめて多い。

Where do you live? → あなたはどこに住みますか? *

What do you have? → あなたは何を持ちますか? *

これは日本語で「過去の行為の結果として生じた状態、またはその状態の継続」が表現されるというイメージ、そのような認識の型が習得されていないためだろう。そして、そのアルケタイプは「ーている=be + ~ing(現在進行形)」ではなく、「ーている=have + p.p.(現在完了)」のはずなのだが、これが隠蔽されてしまったことが大きな原因と思える。

「現在進行形(継続)」から「現在完了」を作ることはできないが、「現在完了」からは「現在進行形(継続)」を作ることができる。

D.B.J.G.の説明を少し変えれば、はっきりする。「しばらく前に始めたこと」という認識には、動詞が一つの「点」としてではなく、「始め」と「終わり」の二点を有する「線」としての認識が前提としてある。「記しうる時間」を考えると、「終わり」はまだ到来していないため、どうしても「始まり」だけを見がちだ。しかし、「始まり」は「終わり」と対をなすものであり、「始まったが、まだ終わっていない」状態、論理的にはそれが「継続」だ。これはかなり頻度が高く、「進行中」という状況と論理的に等価なものを示せる。

始まった + 終わらない = 進行中

「始まったが、まだ終わらない」ことを表す現在完了(継続: have started ~ing*)と現在進行形(be + ~ing)とでは意味が違うのだが、「論理的」には同じ状況・事実が理解される。だが、このような場合、他の論理が入り交じってしまいやすいため注意が必要だ。

次の例文は『みんなの日本語』の第14課で初めて出てくるものだが、これを「continuation・進行・継続」の例とするのはいかがなものだろうか。これは典型とはならない。

ミラーさんは電話をかけています。

Mr. Miller is making a telephone call now. 【certain action or motion in progress : 現在進行形】

【電話使用】 番号を押す→(接続する)→話す→切る
電話をかける

「かける」の語義自体は「番号を押す」だけ、あるいは「番号を押す→接続」までだ。ところが「電話使用」のプロセス全体を指して使うほうが多く、この日本語の例文を読んでイメージするのは「番号を押している(is making a telephone call)」より「話している(is speaking)」だろう。「始まり」という「部分」はそれを含む「全体」を意味する「堤喻(synecdoche)」となることがきわめて多い。

「文字通り」に「番号を押している最中」とならないわけではないが、この英語版文法解説でこれに例として並べる「雨が降っている (It is raining)」と違い、「始め」が「電話番号を押す」と「電話で話す」のどちらのものとも言えるわけだから、扱いが曖昧になり学習者の正確な理解が得にくい。時間の論理は慎重に整理しなければならない。

5. 動詞の時間認識における「点」と「線」

前段で、動詞の表す時間の認識には「点」と「線」の二つのタイプがあると述べたが、英語の時制にはそのような認識が現れない。しかし、フランス語にはその認識の現れるところがある。

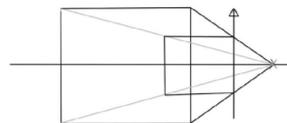
フランス語には英語に存在しない「*imparfait*」という過去時制がある。これは「不完全、未完成」を意味する言葉だが、この名称自体が表すように動詞のプロセスが「完了されていない」と認識される過去時制であり、日本語では「半過去」と翻訳されている。「始まったが、(その時) まだ終わっていなかった」という認識は、言うまでもなく、「始まり」と「終わり」の二点、つまり「線」の認識が前提となっている。英語だけを考えると見えないが、この二種の認識は別に特殊なものではない。と言うより、これは人間の認識において自然なものとなっている。

Il pleuvait fort quand je me suis levé ce matin. (フランス語：半過去)

It was raining heavily when I got up this morning. (英語：過去進行形)

今朝起きた時、雨が激しく降っていた。(日本語：「ている」の完了)

現実世界の中で動詞の表す行為、出来事にはすべて「始まり」と「終わり」がある。基本的に「線」のイメージで捉えられるものだ。「変化」を表す「なる (change)」にしても、純粋な「切り替わり」として抽象化される前の現実の認識では、長さの違いはあれ「時間」を持ったプロセスだろう。「点」はこの「線」の認識が切り替わって生まれるのだが、それは、何のことはない、人間とその対象との「距離」による。



近くで見れば「長さ」のあるものが遠く離れると「点」に見える、これは「視覚」の基本的な「機能」だ。このような「遠・近」の範疇は「大・小」と同様、認識においてはア

ナログでありながら言語的にはデジタルな対範疇となり、一つの同じ対象に対してどちらの範疇を選ぶかは「主観」による。人間の「迷い」は「どちらとも言えるし、どちらとも言えない」状態だが、比較されるのはやはりデジタルな対範疇だ。つまり、客観的には一つの同じ事実に対して、どちらを使っても正しく、その選択は「主観」の表現となる。

- ① 今朝起きた時、雨が激しく降っていた。【線：—————】
- ② 今朝、雨が激しく降った。【点：・】
- ③ 昨年7月10日、雨が激しく降った。【点：・】
- ④ 昨年7月10日、あの日は朝起きると、雨が激しく降っていた。【線：—————】

①は「起きた」で表される視点に「背景」として調和させただけだ⁵⁾。この同じ雨を②のように「点」として示せないわけではない。また、③における「昨年7月10日」は一般的に「遠く」感じられ、「点」と認識しやすいが、④のように意識の中で「視点」を近づけることができる。

このような動詞の時間認識とは別に、「遠慮」や「人称代名詞のさまざまな選択」という日本人の行為も、その世界認識に「遠・近」の区別があることを示している。一方、「半過去」を使っていることで「点・線」「遠・近」の認識を垣間見せるフランス語が、本来の二人称を近い間柄で使い (Tutoyer)、距離を置いた感じで複数二人称を単数二人称として使う (Vouvoyer) ことはおそらく「半過去」の使用とパラレルなのだろう。人称代名詞の選び方で「遠・近」を表さない英語に「半過去」がなく、「現在／過去進行形 (be + ~ing)」を使うことにはやはり調和が感じられる。

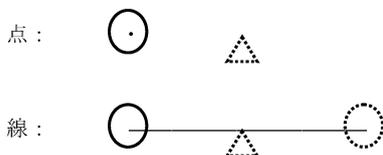
「遠・近」の認識を共有し、「過去の未完了 (継続)」と定義できなくもない「一ていた」に「半過去」が対応することを考えれば、フランス語は英語よりは日本語に近いとも見える。しかし、「現在の未完了 (継続)」の「一ている」に対応する時制がフランス語にはない。この場合「現在時制」が使われる。

時制の使われ方のずれはただの部分なのではない。これは時制体系全体のずれだ。英語では「過去」と「現在完了 (have + p.p.)」が明確に区別される。一方、この「現在完了」と構成要素が同じで、英語と同じ使い方をしておかしくないフランス語の「複合過去 (passé composé ; avoir + p.p.)」は、フランス語のもう一つの過去「単純過去 (passé simple)」と「時間性」において区別されていない。名称が示す通り、英語が「現在時＋完了」と時間性を表現するのに対して、フランス語は「単純 (simple)」に対して「複合 (composé)」、要するに用いられる言葉の数という形式的な違いを表すだけとなっている。フランス語の「複合過去」は「現在」という成分を含まず、ただ「過去」を表すと考えるべきなのだろう⁶⁾。

「～ている」が「始まったが、まだ終わっていない」状態を表せるためにはもう一つ確認しておかなければならないポイントがある。

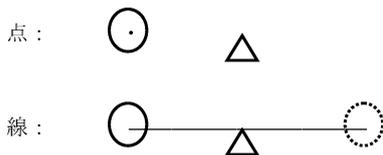
英語でもフランス語でも「雨が降り出した（まだ止んでいない）」という事実を表すために「過去」を選んだりはしない。ところが、日本語では「始まった」だけで「降った」と「完了」を普通に使う。また、待っているバスが遠くに見えた瞬間、「It's coming(来る／来つつある)」が使えないわけではないが、優先的に選ぶものは「完了」の「来た」だ⁷⁾。

【～した：完了+／現在時への言及-】

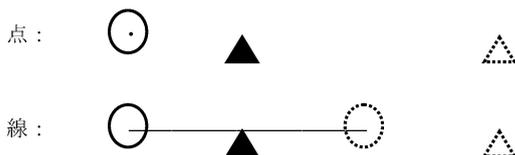


これに「いる」の表す現在時、また「いた」の表す過去の基準時を書き加えれば次のようになる。

【～している：完了+／現在時への言及+】



【～していた：完了+／基準時への言及+／現在時への言及-】



4で引用した D.B.J.G.の文法定義に使われた例文では、「読んでいる」を現在完了に替えれば、すべて現在完了となる。

	現在進行形	現在完了	
新聞を <u>読んでいる</u> 。	is reading	has started reading*	【線】
りんごは <u>くさっている</u> 。	*	is rotten	【点】
木が <u>倒れている</u> 。	*	has fallen	【点】
鈴木さんを <u>知っている</u> 。	*	have (知るの p.p.)	【点】

また、これらに続いて「習慣」として定義される例は、線状に繰り返す「点」、つまり「点線」と見ることができよう。ミクロ的には「点」でありながら、マクロ的には「線」であるため、「始まり」と「終わり」の二点が認識でき、「繰り返す行為（習慣）」を「始めたが、まだ終わっていない」という状況が示せる。

【現在の習慣：完了+／現在時への言及+】 毎日4マイル走っている。

点線： 

【過去の習慣：完了+／基準時への言及+／現在時への言及-】 毎日4マイル走っていた。

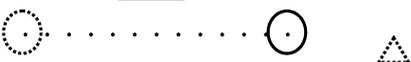
点線： 

ただし、文法解説、文法定義ではどうも意図的に言及しようとしていないようなのだが、「～ている／～ていた」を使わなければ「習慣」を表せないわけではない。「する／した」ですませる場合がすくなくない。

【現在の習慣】 毎日4マイル走る。

点線： 

【過去の習慣】 毎日4マイル走った。

点線： 

「～ている」がどうして「現在進行形」と「現在完了」の両方に対応するのか理解していないため、というより教えられていないことでできた欠落を自分で補ったと思える日本語の「誤用」は少なくない。日本語教育において「完了」の扱いを曖昧にすべきではない。

- 何か食べましたか。 — はい、もう食べました。
 — いいえ、まだ食べていません。
 — いいえ、まだ食べませんでした*。
- 知っていますか。 — はい、知っています。
 — いいえ、知りません。
 — いいえ、知りません*。

日本語文法としては「動詞の活用形（音の変化）」のように「規則性」が強く出るものがまず扱われる。ところが、外国人学習者が疑問を感じるに違いないこのような「形式における不

規則な対応」については「使われているという事実」の名の下に、ただ練習によって「習得」させるだけになる傾向が強いように思う。まるで英語動詞の「不規則変化（現在・過去・過去分詞）」のようにである。しかし、英語では文法機能についてちゃんと理解でき、音声、語形のみ規則性がないだけの「動詞の形態上のみの不規則変化」となっているのとは違い、日本語のこのような現象は他の文法の基本として教えられた「論理」を一見無効にしてしまう。だが、「論理の含まれている現象」と感じられれば、学習者は当然自分で考えようとする。

英語文法では「be + ~ing」「have + p.p.」「used to」という形式はそれぞれ「継続」「完了」「習慣」というアスペクトに一対一で対応する。一つの形態（あるいは語彙）が複数のアスペクトを表したりはしない。

一方、日本語文法では「～ている」の説明に「継続」「完了」「習慣」のすべてが出てくる。そして、英語のアスペクトの分類に合わせて区別ができるようにするため、「自動詞／他動詞」「動詞語義の分類」「文脈」「状況を表す副詞」など関わりのありそうなものを総動員し、極めて複雑で錯綜した説明を行う。

「細やかな差異と分類」は外国人にとって習得が困難だろうと認識しつつ、その繊細さを誇り、外国人の使う日本語でこれに関わる間違いがあればその原因は基本的に「学習者の理解不足」という見方をしてしまいやすい⁸⁾。しかし、日本人は本当にそんな複雑な「情報処理」を行っているのだろうか。

英語でこれらのアスペクトがきれいにまとまっていると見えるのは、「自動詞／他動詞」「動詞語義の分類」「文脈」「状況を表す副詞」の違いなどに話を持っていかず、ごく単純な形態の差異と語彙を指標として分かれているからだが、日本語が「～ている」という一つの形態でどうしてこれらのアスペクトを表しうるのか基礎となる論理を確認すべきだろう。

6. surprise と「驚く」、論理の構造化と現象の提示

日本語の「驚く」という動詞をそのままのイメージで翻訳できる英語はない。この言葉で表すような現象、状況は日本語にすると「驚かせる」と訳すしかない他動詞 **surprise** が使われ、日本語と英語の違いを示す典型的な例となっている。

そのニュースを聞いて、驚いた。

I was surprised to hear the news.

わたしはそのニュースを聞いて驚かされた。（他動詞／受動態）

そして、この英語動詞にとって典型的な使い方がいわゆる「物主語」の構文だ。

The news surprised me.

そのニュースは私を驚かせた。

これは英語を学ぶ日本人にとって「文法」とそこに使われる「論理」がどのようなものかを知る格好の機会となる。しかし、これほど違いがはっきりしていると、そう迷いもせず学習され、そのうちただ当たり前の違いとしか感じられなくなる。

しかし、この英語翻訳との対応を覚えてただけでは日本語を学ぶ外国人が動詞「驚く」を正しく理解したと言えない。「驚く」はどうして自動詞なのか、他動詞を使う英語とは何が違うのか、それを理解していないからだ。

「日本語文法の欠陥」のように感じられるからだろう、日本語教育では触れずにおこうとするのだが、本稿で考察してきた日本語の基本構造がここにも表れている。この文には二つの別の「時間」が含まれており、「時制」というヴィジョンに納まらないのだ。この文は二つの時間の二つの文を一つに繋いだだけだ。

そのニュースを聞いて、驚きました。(=そのニュースを聞きました。驚きました。)

これは英語に直訳すると、次のようになる。

I heard the news and I was surprised. (=I heard the news. I was surprised.)

最初に使った英語翻訳にも動詞が二つあるが、動詞を to-不定詞によって従属化し、焦点が一つの文になっている。このような文の構造化は時制の根底にある美意識によるのだろう。

日本語では、事実、出来事が一つ一つ自然のままの時系列で繋がれていく。一方、英語では時制動詞を中心に置き、付加動詞、従属動詞として繋がれた動詞が理由を表す。あるいは、原因を主語、その結果となる現象を見せた人間を直接目的語とすることで、端的に言えば「原因-結果」の「論理」に再構築する。

「喜んだ／喜ばされた」、「悲しんだ／悲しませた」も同様だが、これらは単に文法として見れば、自動詞構文と他動詞構文(使役構文)の違いにすぎない。どちらの構文を使おうが、指示される客観的事実、内容に違いはないので、論理的には等価と見なされる。しかし、それだけだろうか。

文法、構文という概念は西洋言語のものを基準とするため、抽象度の高い論理構造を基本としている。三上章による日本語文法の見直しなどは、この「論理」を厳密に基準とすることで、そこからはみ出す助詞「は」を「主題」「提題」と明晰に位置づけることがで

きた⁹⁾。しかし、その説明はあくまで「論理構造」を基準としており、そうする限り切り捨てざるをえないものがあった。

「論理」の視点に立てば、「原因」「結果」はそれぞれ「主格」「目的格」と重ね合わせてもまったく問題がないように思えてくる。ここで見た英語の動詞 **surprise** などの「物主語」の他動詞構文がその典型だ。

一方、英語に直訳できない日本語の自動詞構文は英文法型の論理構造を示さないのだから、論理性に欠け、まるで文法として劣っているかのように見えなくない。論理至上主義に立てば、「論理を構成できない」ことは紛れもなく欠点だからだ。

しかし、抽象され純化された論理にはないもの、西洋文明がそのようなものを意味のないものと見なしたわけではない。意味がないどころか、西洋文明ではそのようなものを文法とは別の、独立した学としている。言語の三つの側面は論理学 (Logica/Dialectica)、文法学 (Grammatica)、修辞学 (Rhetorica) として文科三学 (Tritium) に束ねられる。

論理構造は一般的に「図」で示されることから分かるように、平面的、空間的にイメージが構造化され、時間性を持たない。つまり、「一瞬」の中にまとめ上げ、描かれた構造だ。しかし、平面・空間というものの自体、現実世界の中で考えれば、広大なものは全体の認識に時間が掛かるのだから時間性が完全にゼロとは言えない。

一方、人間の現実の認識活動はすべてが時間の上にあると言えなくないのではないだろうか。例えば、論理的には横並びとなる複数の論理項でも同時に一瞬で認識されることはなく、あったとしてもそれは例外的だ (病的と判断される可能性がある)。自然のままの時系列に従う現実の認識を平面的、空間的に投影、転写し、編集したもの、それが「論理」だ。従って、「原因」「結果」にせよ、「主格」「目的格」にせよ、我々はそこにかすかに「時間性」を感じるはずだ。

そう考えれば、英語の **surprise** に論理的に対応する他動詞 (使役動詞)「驚かせる」ではなく、自動詞「驚く」を基本構文として用いる日本語の特質が見えてくる。日本語は、「驚く」という心理現象を自然な時間の経過の中に置き、「原因」と「結果」を一連のプロセスとして扱っているのである。

ニュースを聞いた → 驚いた

ニュースを聞いて 驚いた

二つの時間が同時と思えるほど接近することはある。しかし、絶対に同時とはなりえない。「驚く」はあくまで心理的反応であり、知覚された情報がニューロンを伝わる時間はどうしても必要だからだ。従って、このように二つの時間を繋ぐヴィジョンは、西洋言語の抽象化された人工的論理ヴィジョンに対して、完全にとはいえないまでも、より「自然」に近い認識形態

と言えるだろう。

7. おわりに

「時制」が文の中心を定め、それを基準にすべてが構造化されるような言語は一神教世界のイメージにつながる。一方、中心を定めず、次から次と動詞を継ぎ、視点が時間の流れに乗っていく日本語は多神教世界を映していると言えるのかもしれない。

本稿ではたくさんの動詞が連なり伸びてゆく日本語独特の様態について考察したが、英語の時制動詞部と比べられることの多い補助動詞、複合動詞以外にも動詞はさまざまに使われる。3 で見たように、英語では動詞の支えとなる前置詞、副詞に相当するものが日本語ではよく動詞になっている。また、本稿では扱わなかったが、「違う／変わらない／いけない／死んでいる／晴れている／曇っている／落ち着いている／ふくらんでいる／へこんでいる／汚れている／生えている／太っている／痩せている／・・・」など、英語では形容詞で捉えている「コト」を日本語では動詞で表すことがひじょうに多い。形容詞は切り取られた一瞬の、あるいは不変のイメージのようなものだが、これら日本語の動詞表現は「前と後」の経過、流れる時間を感じさせる。

一点を定める西洋言語の「時制」が「遠近法」「透視図法」のヴィジョンに似ているのに対し、長く伸びてゆく日本語の文章は視覚の論理が異なり、時間を「絵巻物型」のヴィジョンで捉えていると言えるだろう。これは「物語的」だ。

物語は文を長く連ねることで形作られるが、一つの短い文はそれだけで最小の物語ともなるのだろう。「時間」の上に築かれれば、一つの文にも相応の時間がこもりうる。日本語の文法はそんな「時間」の面影を見せている。

例えば、主題、提題の助詞「は」については「文法」「論理」としてしか扱われないのだが、「主題化」とは「語りにおける行為」であり、その本質は「時間性」を含む。三上章の論理文法は当然「図」となった文を見るのだが、本稿では「図を描くプロセス」を考えたと言える。国語文法では「係り助詞」、つまり「係る」という行為において捉えられてきた「は」の機能を「主題化」と捉え直したことで、「図」の一部だけでなく、全体の構成を見極めたのはいいのだが、全体を見渡すために時間性を消された「文」は、「生きた隠喩」と「死んだ隠喩」を分けるポール・リクール¹⁰⁾に倣って言えば、「死んだ文」だ。

「生きている文」は「はなし」「かたり」「うたい」の行為の中で捉えられるものだろう。

言葉の「時間性」を見失わず「文法」を記述する、このような視点に立つと、「現象文法」とでも言えるものが夢想される。(了)

-
- 1) 中川正弘、日本語における「ねじれ」の感覚と文の単位性、『広島大学留学生教育』、第11号、2007年
 - 2) Seiichi Makino & Michio Tsutsui, *A Dictionary of Japanese Grammar* (日本語基本文法辞典), The Japan Times, 1986
 - 3) 日本語教育辞典、日本語教育学会編集、大修館書店、1987年
 - 4) 日本語文法ハンドブック、スリーエーネットワーク、2000年
 - 5) Harald Weimrich, *le Temps*, Coll.Poétique, Seuil,1973 参照
フランス語では、物語は一般的に単純過去（もしくは複合過去）で提示される動詞が「前景(premier plan)」、半過去で提示される動詞が「後景(arrière plan)」となっている。つまり、時制の選択は言述にとって外の出来事や文法規則に支配されるのではなく、言述の内部の構造、関係性に対する主体の制御行為と見なされる。
 - 6) 「単純過去／複合過去」の区別を歴史的にはそれらの起源である「アオリスト(aorist)／完了」に重ねようとする言語学者もいる。しかし、起源の異なる二つの時制がおそらく混同という「普遍的な現象」によって時制として等価となり、その後「単純過去」は社会文化的な文脈において、小説(roman)のような「語り」形式の制度的指標となったと考えるべきだろう。日常世界で「複合過去」を使うのは、確かに「会話」も「思考」もその言語主体の存在する「現在時」だったから生まれた時制だろうが、言語も社会制度の一つとして不変ではない。
«Le passé narratif (=passé simple) fait donc partie d'un système de sécurité des Belles-Lettres. Image d'un ordre, il constitue l'un de ces nombreux pactes formels établis entre l'écrivain et la société, pour la justification de l'un et la sérénité de l'autre. Le passé simple signifie une création : c'est-à-dire qu'il la signale et qu'il l'impose.»
「それゆえ、語りの過去（＝単純過去）は文芸の安全システムの一部をなしている。秩序のシンボルとして、単純過去は作家と社会の間で、前者に正当性を、後者に平穩をもたらすために結ばれたあの多くの形式に関わる契約のひとつとなっている。単純過去はそこに創造行為があることを意味する。つまりそれは創造行為の指標となると同時に創造を強いるのである。(翻訳は筆者)」
Roland Barthes, «L'écriture de Roman», *Le degré zéro de l'écriture*, édition de Seuil, 1953, p.26
 - 7) このような「来た」の使用については、「来た＝視界に入った」とも説明できるが、「来た＝『来る』が始まった」とも説明できる。
 - 8) 市川保子、日本語誤用例文辞典、凡人社、1997年
 - 9) 三上章、象は鼻が長い、くろしお出版、1960年
 - 10) Paul Ricœur, *La métaphore vive*, Seuil, 1975